

旧中山邸の生立ちと現在

⇒再生に向けて



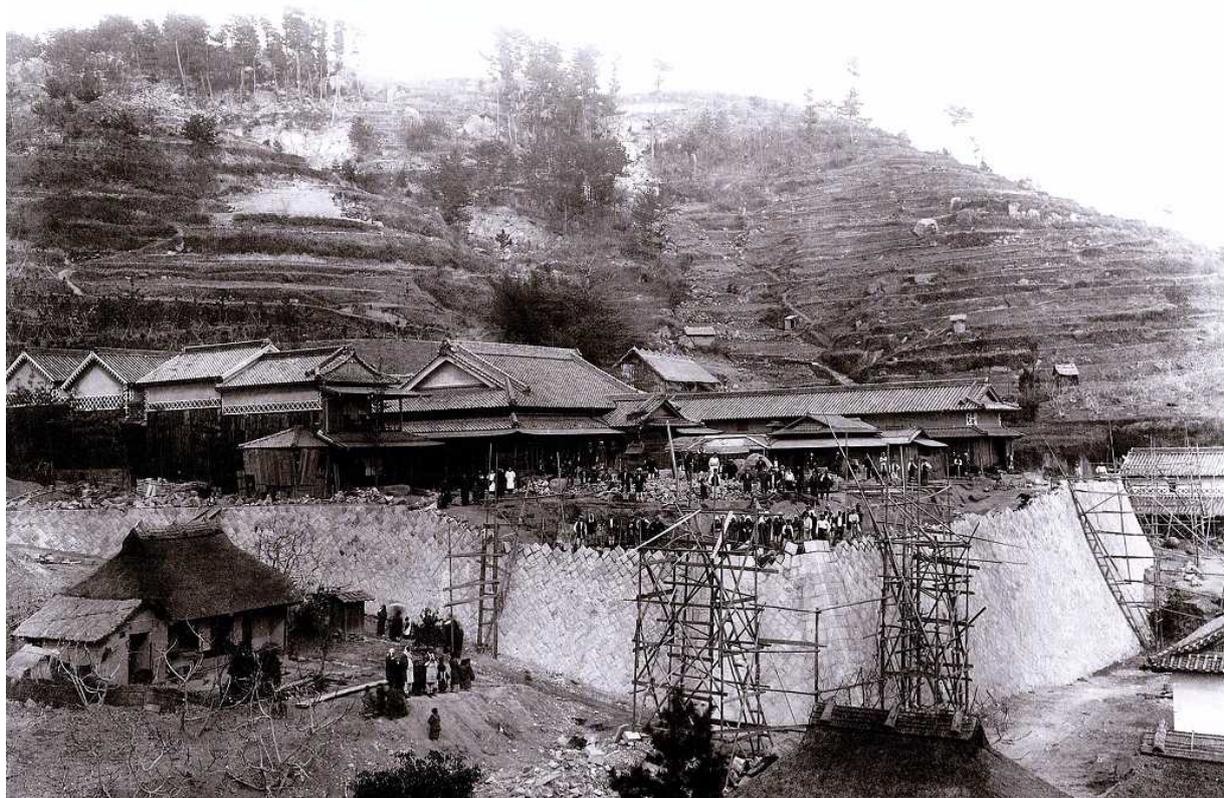
敷地

連島の山並み斜面地（倉芸大南東）に位置する敷地はまず反立つ10mの石垣が目に入る。主屋は長屋門と離れの間であり北側は現在の倉敷芸科大のある山があり、南側は大きく開放された開口の外に流水を配置した広い庭園と、その遠方に水島の町が望める。

石垣は当初地元の石屋が担当したが経験・技術を持ち合わせない為、最終的に大阪の大林組に依頼し土木技師を呼び大阪城の石垣に倣って施工した。基礎には松杭を使用し石垣隅部は栈木積み（長短の石を交互に組、近世のお城と同様の工法）とし上に向かって反りをつけている。隅部以外の石垣全体は落し積みで北木石を使用している

当時は度重なる洪水・高潮・地震があり、高梁川の河川改修（明治20年）で敷地の選定には配慮されたと思われ、又建物も山際に蔵や主屋を配して盛り土側には庭園を置き地盤地質を考えての配置だったと思われ。

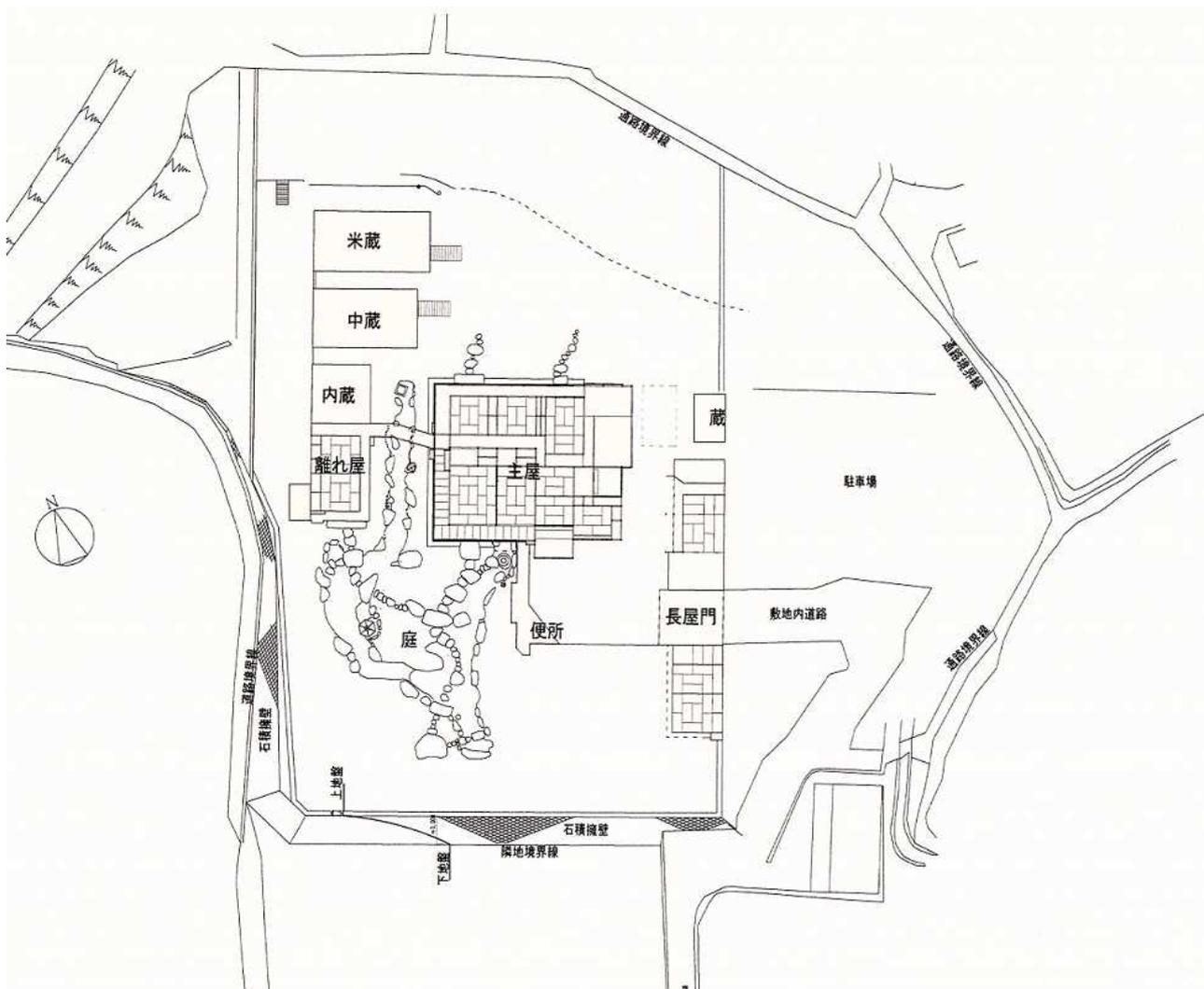
参考文献 連島町史 災害 P293～P296 P419



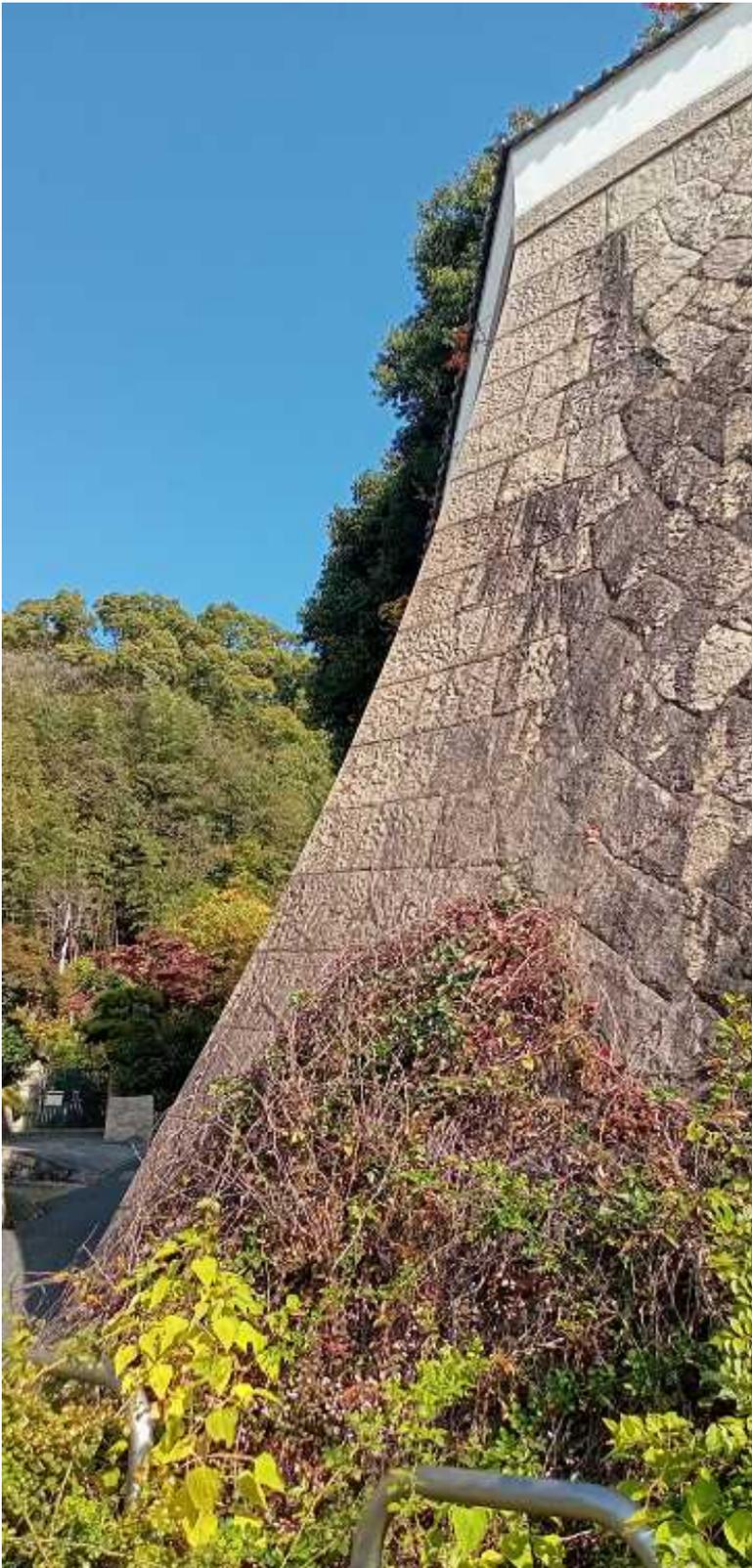
山からの斜面に建設され、すでに建物は完成している。最後に庭部分の盛り土と石積擁壁を築造している。かなりの大掛かりな工事であったかがわかる。

石垣の東側坂道を登ると、正面に長屋門が迎える。中央の櫓唐戸を潜ると主屋の大屋根が正面にあり木立越しに石張通路と玄関が見える。左手には内堀越しに庭園があり、そこから水島灘が眺望できる。以前はこの場所に茶室があったが、現在は解体されている。

主屋の西側には離れと内蔵が渡り廊下で繋がり、その北方向には中蔵・米蔵が並ぶ。離れ屋と主屋の間から庭に流水を配した庭となっており、敷地の北側の裏山から湧き水を引き利用している。現在も庭の隅に井戸・池が残っている。



庭から望む水島の工場地帯



石垣の高さは10mを超える。

石垣隅部は棧木積み（長短の石を交互に組、近世のお城と同様の工法）とし上に向かって反りをつけている。隅部以外の石垣全体は落し積みで北木石を使用している。

長屋門



桁行13.5間と奥行（梁間）2.5間の大きさで正面中央間口三間の門部と南側客間8帖次の間6帖玄関納戸3帖、北側に納屋和室6帖脇間3帖、梯子階段、浴室便所が並ぶ。北側中二階（厨子二階）は厨子となり梯子階段で上る。

外観は白漆喰壁大壁で腰部の1800はなまこ壁で隅角も瓦が付、足元に北木産地覆石が成500程で地盤に沿

い廻る。軒は黒漆喰で垂木と軒天を塗り込める。

屋根は入母屋造りの本瓦葺（讃岐産）小起り付、野地板は葺土留サカブキ納となり、軒先部分は軒裏からの延焼防止のため土壁を屋根上巾600程に小舞竹を巻き込み塗込んでいる。

内面側屋根にはうだつが付き隣への延焼防止の役目を担っている商家の証とも言える仕組みを取り込んでいる。

正面3間の門廻りは総檜造りで土間には480角四半貼りの北木石（ノミ叩仕上げ滑り止加工）が敷かれ、大扉は檜鏡板（木目優美）唐戸（巾1300高2700）両開と門柱（340）冠木（成350）に潜戸が対に配する。門内外の両脇壁にも檜鏡板（巾1200成1800・巾1700成1800）が嵌込まれている。

天井は檜板で半間毎に棧梁（小梁）が正面に小口を向ける。上に人見梁（成350）が門構えを成している。

門を入り左手には境高塀の杉桁板戸を潜ると客間がある。右手に塀を潜ると使用人室が並ぶ。

主屋に面する下屋根は日本瓦葺で軒も深く上屋根と違い近代和風住宅様式とな南側（客室側）は杉丸太垂木と北側角垂木と趣を変えるが、桁は杉化粧丸太が通り、南角は丸太交差の隅納まりで腕木持ち出しとなっている。漆喰はねずみ漆喰で東側（正面）と下屋より上部の蔵造りとの雰囲気が変わる。

北側軒下は内露地で半間土間となり、雨戸で仕切り、上部欄間で明りと通風を

採る。

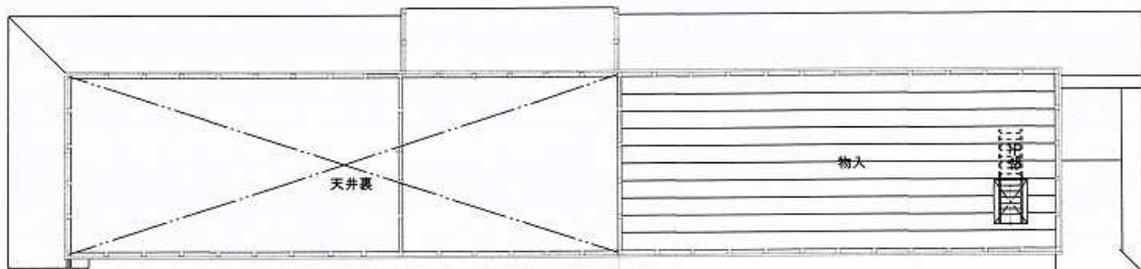
土間と地覆石（延石）の上に床下の換気孔が設けられ、南は栗殴りの壁止で隙間を造り、北は腰板に換気長穴を設けている。

門より北側は厨子二階（中二階）となり回転軸の付いた跳ね上げ梯子階段で上がる。小屋組は六間長中置梁（中引梁）八面取380角が中央に置かれ、直交して小屋梁と合掌登り梁が交互に並び又入母屋隅部には妻壁の受け梁と隅木が重なる。又軒先出桁を支える桔木が1間毎に有、厨子二階には主屋側に親子格子連子窓が二ヶ所付く。

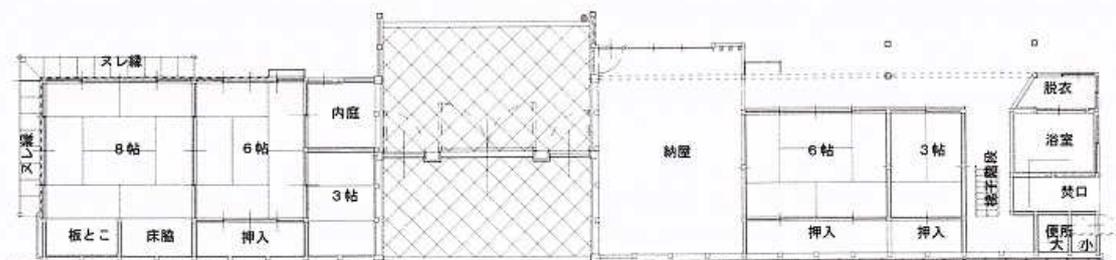
門廻り以外の主要な柱（120角）は梅材が用いられている。

内部客間8帖は一間の床と床脇が付く、床は松厚30蹴込み床で床脇は松地板と三角隅棚が付く、床柱は絞り丸太、座敷は砂壁で内法鴨居杉が通り天井高2600と杉桁竿天井、障子は中程が硝子となり座位での外景色が具合良く観える。次の間境は襖と欄間で繋がる。

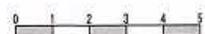
北側和室6帖の天井は厨子二階の床・小梁となって構造部を表しとなっている。北側端には風呂と便所が生活空間として備わっている。丁度傍に井戸が有り向いに母屋の勝手口近い。



長屋門 2階平面図 s=1/150

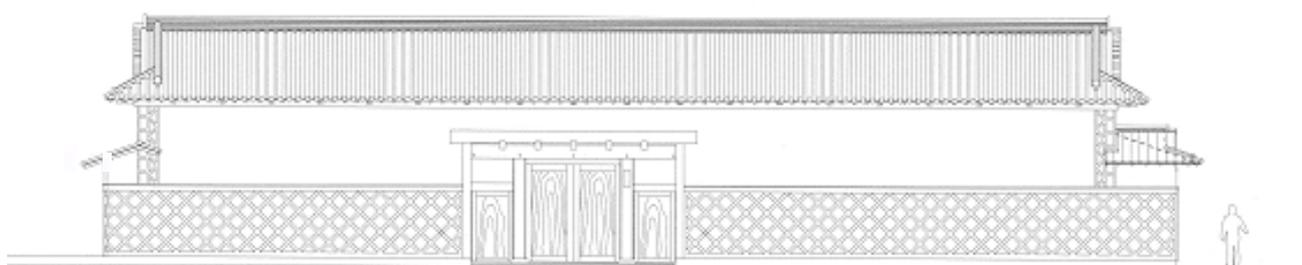


長屋門 1階平面図 s=1/150

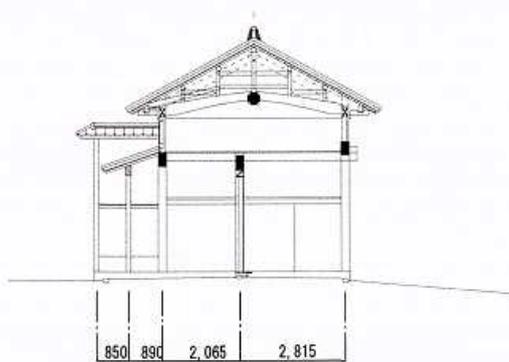




西立面图

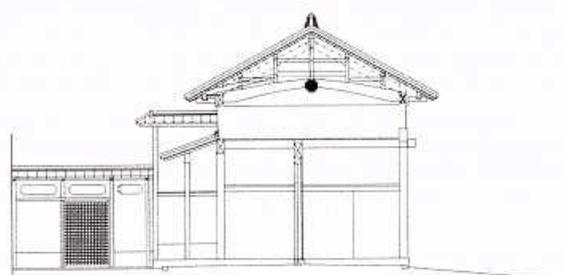


東立面图



断面图

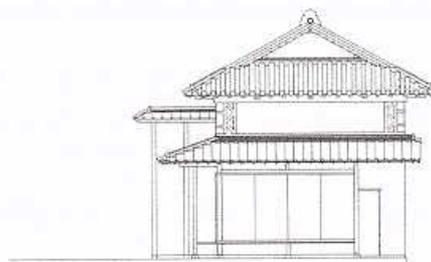
850 890 2,065 2,815



断面图



北面立面图



南面立面图



長屋門の東側（外部）は蔵様式となり、西側（内側）は近代和風住宅様式となつて門を境に趣が変わる。

上屋屋根は全て本葺き瓦屋根で吹かれ、西側の上屋は本葺き瓦屋根で下屋部は門の部分以外は日本瓦で葺かれている。外壁漆喰はねずみ漆喰で塗

られている。



門と北側納屋

門部屋根の両側にうだつが設けられている
2階は厨子二階となる



南側客間8帖

天井裏は厨子とはなっていない
下屋根は日本瓦葺で軒も深く上屋根と違い近代和風住宅様式となる



下屋根は日本瓦葺で軒も深く上屋根と違い近代和風住宅様式となる
北側軒下は内露地で半間土間となる



南側8帖和室

ここから座位で水島の町並みが見渡せる



小屋組み

小屋梁と合掌登り梁が交互に並び又入母屋隅部には妻壁の受け梁と隅木が重なる。又軒先出桁を支える桔木が1間毎に有



蔵の軒先防火仕様（蔵では一般的）
竹小舞に土を乗せ瓦を葺く
軒裏は垂木とともに漆喰を塗る
中山家の蔵は全てこの仕様となる

主屋

構造 木造二階建
年代 大正8年竣工



1) 建築された時代と背景

現在の地に邸宅建設の準備を始めたのは、明治44年（1911）頃であり、それから10年の歳月をかけ大正8年に完成した。

主屋は長屋門と離れの間であり北側は現在の倉敷芸科大のある山があり、南側は大きく開放された開口

の外に流水を配置した広い庭園と、その遠方に水島の町が望める。

主屋について

旧宅1階は桁行10間、梁行8間、2階は4間・3間を一部厨子二階様式で納屋として利用している。

屋根の上屋根は東西面が入母屋造り日本瓦葺きとなっており下屋根は軒の出が1930mmと深く日本瓦葺きで軒先から1030mmは銅板葺きとしている。

下屋根には桔木（はねぎ）が入れられ、茅負と裏甲により厚みのある屋根となっているが日本瓦と銅板により俊爽な雰囲気がある。軒裏は梅の化粧板で垂木幅に合わせているにもかかわらずわざわざ小舞天井としている。玄関廻りの軒は吹き寄せ垂木としていていずれも数寄屋のこだわりがみられる。南側の玄関より西面、西側、北側は広縁部で大きく柱のない開口となっていて広く庭を眺めることができる。開口の上部は統一された欄間が設けられている。

外壁は一部梅の板張りがあるものの柱は主に125角の梅材となっていて、ねずみ漆喰仕上げである。

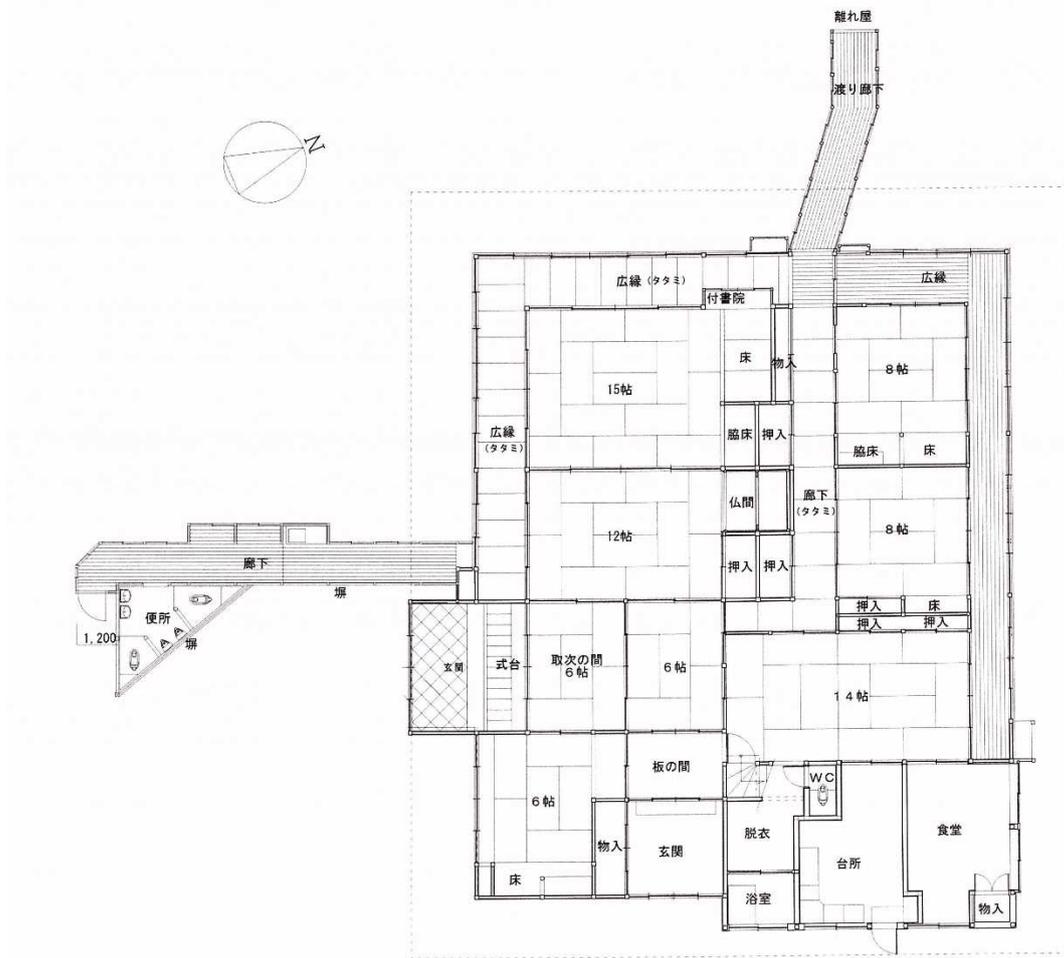
平面

中央部からやや右寄りに玄関、6帖の取次の間を設ける。取次の間の右手には蹴込み床の付いた6帖の和室があり、その奥は3畳ほどの板の間を介して、家族やかるい来客が利用していたと思われる脇玄関と14帖の奥の間や台

所、食堂へとつながる。一方、取次の間の左手には、竿縁天井の12帖と15帖の続き間があり、客間として使われている。

15帖には東向きに間口2050程度の付書院と間口2455、奥行き1500の本床と1間の脇床がある。また12帖には2畳の広さの仏間がある。

客間には南と西の面に畳敷の広縁があり、西の広縁は一部が板敷となつて北面に繋がる。取次の間の正面奥は14帖の奥の間に繋がり、奥の間からは左手に畳敷きの中廊下へと繋がる。中廊下は、北側に二つの和室（8帖）をそれぞれ繋ぎながら、西の板敷広縁にでる。北面の和室は、それぞれ床付きで、北面の板敷広縁を介して、中庭を眺めることができる。



構造

建屋の構造は石破建ての伝統構法の近代和風建築である。

主屋小屋組みも、中山邸の他の建物同様に、束建と登梁を交互に使い、双方の良さで、補い合っているように思える。

丸桁から2間入ったところで、梁間方向・桁行方向どちらも末口尺二寸以上の1本物で小屋梁を渡し、中置梁は2間入った小屋梁に掛けてこれも1本物で継手もない。物を設えている部材は見ごたえがある。

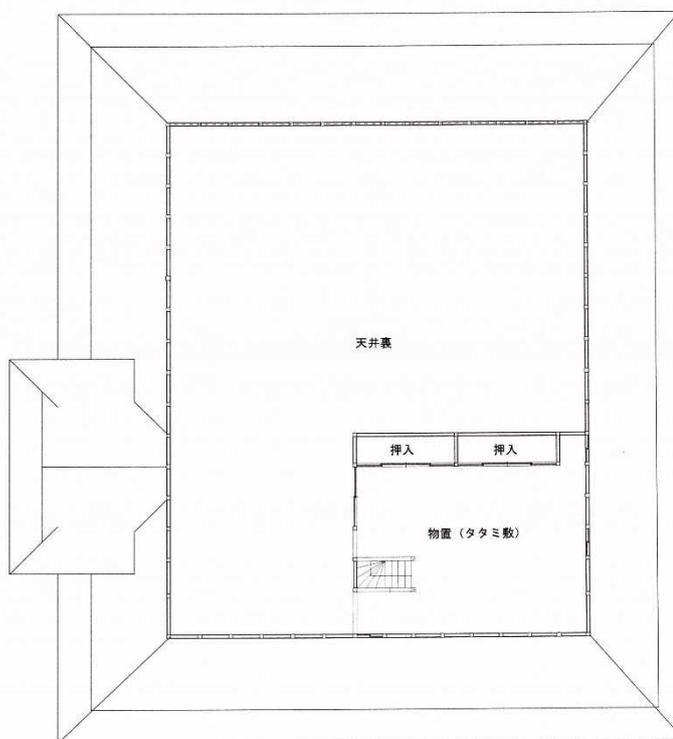
下屋は茅負・裏甲・広小舞を設え、茅負に杓子彫りをして桔木を刺した上に、金物で化粧垂木を吊っている。また野垂木も力ダルキとして下屋を支えている。大屋根の軒は桔木でもって出桁を吊り上げて納めている。場所によっては出桁を小屋にそのまま引き入れて尻を母屋に突っかえている物もある。妻の矢切は2間入った梁の外側に別仕立ての梁を渡した物に組み上げている。



小屋組み



小屋組み



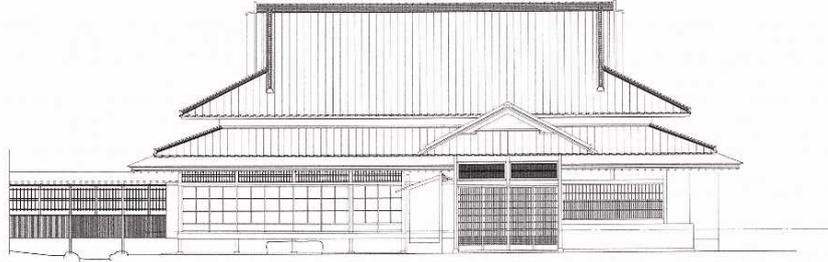
2階平面図



小屋組み 奥に登り梁が見える



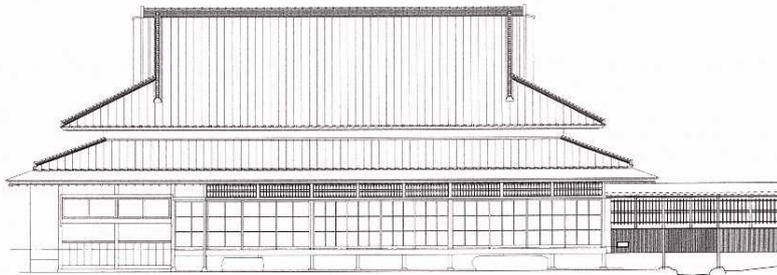
桔木の収まり



南立面图



东立面图



北立面图



西立面图



玄関廻り軒天井
吹寄せ垂木 椀無垢天井板



軒天井
化粧垂木に小舞天井 椀無垢天井板



縁の外観



付書院付床の間と脇床



縁より庭を眺める
大きく開放的な窓と上部の欄間



15帖と12帖の堺の襖と欄間

母屋と離れ屋を繋ぐ高床式渡り廊下

杉の丸太柱に大間の棧にガラスが入った建具の外は竹の縦格子が付く。庭に水を流し込む流水の上を渡り、主屋や離れ屋と違って質素で天井の曲面が近代和風の華奢な造り)が次にどんな空間が現れるのか期待を持たせる。

主屋と離れ屋の間の庭が渡り廊下の窓越しに清風と流水とともに安らぎを与える。

屋根は当初は檜皮葺きであったが、後に銅板葺きとした。

外壁は聚楽塗と思われ、腰壁に細い丸太を密に張っている。軒は壁、開口部の保護のため大きめの出としている。



離れ 内蔵

母屋より高床式渡り廊下（屋根は銅板葺き：建設当時は檜皮葺き、天井の曲面が近代和風の華奢な造り）が周囲庭園景色と調和する。廊下を通ると住居部と内蔵前に接する。



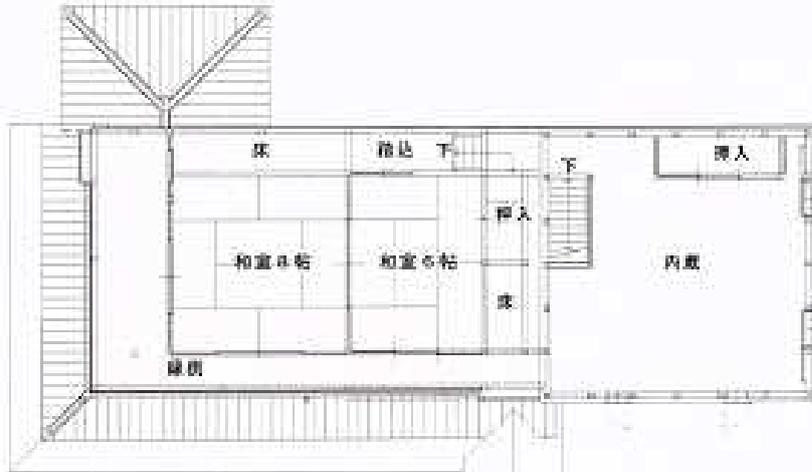
1階住居部は和室8帖炉付きに和室8帖次の間と、床書院付きの近代和風数寄屋建築である。廊下（縁）を介して便所が南西の角に配置されている。2階は南側に広い縁側がある。東と南側の縁は雨戸を開ければ

濡れ縁となり自然の風を取り入れた構造となっていて水島灘（水島の町）と庭を見下ろすことができる。もともと雨戸以外の建具はなかったものの住み家とするには不適切な環境であったため後にガラス戸を設置している。家族の部屋であったと思われるが、貴賓客の宿泊や打合せの部屋としても活用したものである。

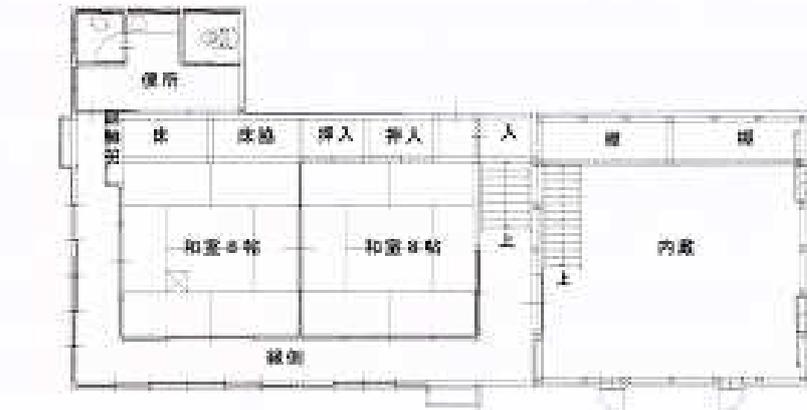
屋根は上層は入母屋反り付き日本瓦葺で縁の屋根は銅板葺としている。1階は飛燕ダルキと地ダルキを配し大きく軒を出し、日本瓦葺で軒先74cmを銅板葺の軒が入る。

内蔵は土蔵造りで屋根は日本瓦葺きの切り妻、外壁は黒漆喰塗りで腰部はまなこ壁となっている。

構造は中山邸の他の建物同様に、束建と登梁を交互に使い、双方の良さで、補い合っている。



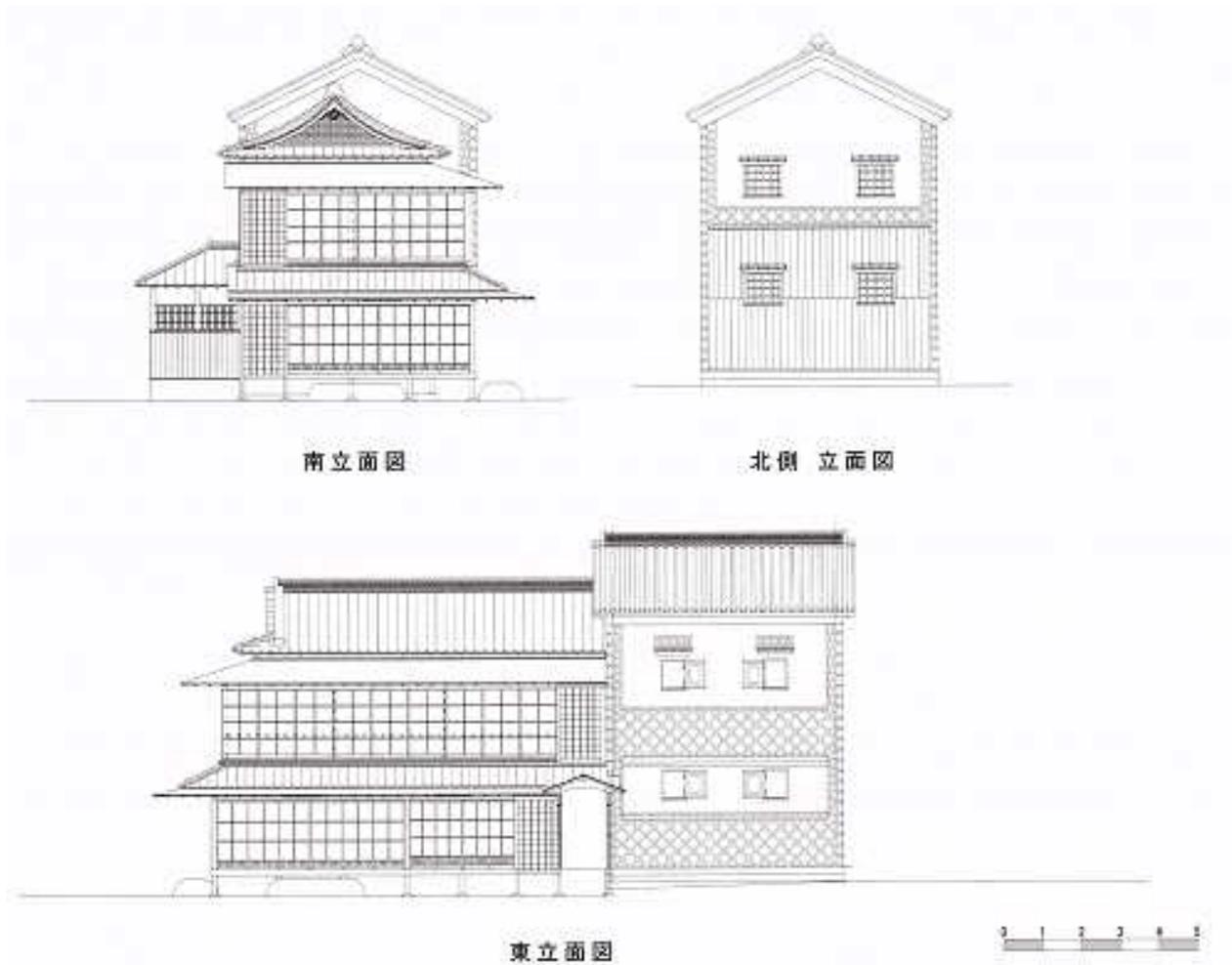
離れ・内蔵 2階平面図 1/150



離れ・内蔵 1階平面図 1/150



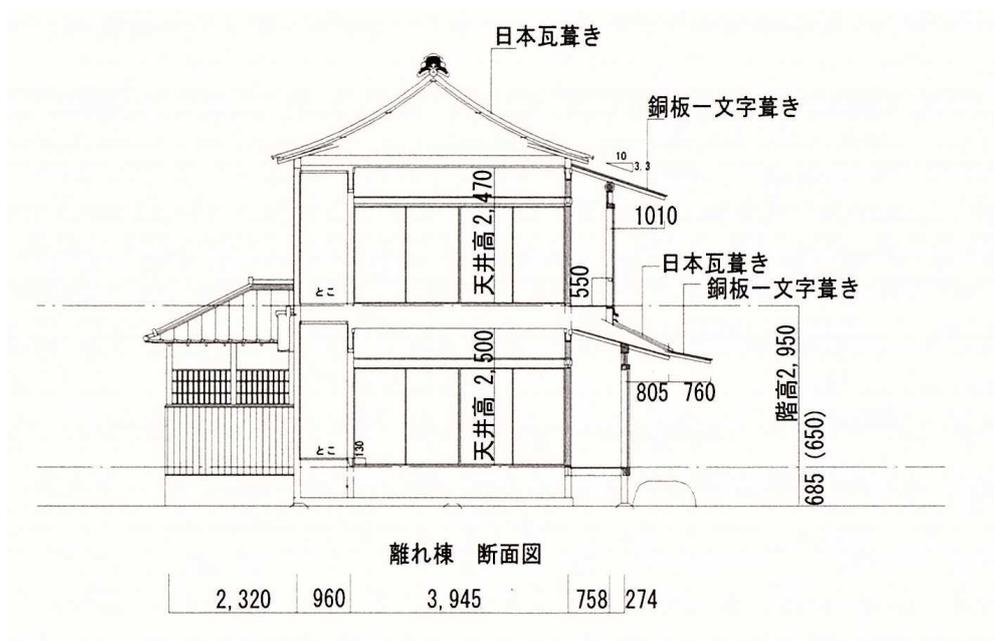
離れ屋と一体に内蔵が続く。屋根は他の蔵と違い日本瓦葺きとなっていて離れ屋の屋根に合わせている。外壁は黒漆喰仕上げで腰部をなまこ壁としている。



南立面図

北側立面図

東立面図



離れ棟 断面図

2,320	960	3,945	758	274
-------	-----	-------	-----	-----



軒の出は大きく、廊下の雨戸を開けると濡れ縁となる
今はガラス戸が入れられている



廊下の天井は杉丸太の垂木に小舞天井となっている



1階住居部は和室8帖炉付きで床書院付きの近代和風数寄屋建築である



2階の南側は広い縁となっていて水島灘（水島の町）と庭を見下ろすことができる



内蔵の小屋組みは束建と登梁を交互に使い双方の良さで、補い合っている

中蔵

・構造・規模

木造 2階建て 床面積 1階 59.8m² 2階 59.8m² 延床 119.6m² 約3間×6間
床の高さ 約2.0m 軒高 約5.5m 妻入り 片引漆喰塗戸 網戸付

・基礎

基壇 御影石加工積 小叩き仕上 高さ約2.0m 外階段 御影石6寸角 小叩き仕上

・外壁

黒漆喰塗 腰 貼瓦なまこ壁塗り菱貼 出隅貼瓦 なまこ壁 西面 焼き板貼
開口部 2階内開窓 平板面格子付き塗籠 瓦庇 目板付板瓦 玄関屋根本瓦葺

・屋根

日本瓦本葺 軒先巴瓦葺 勾配 5寸 クラハ 千枚葺 派風漆喰塗 貼瓦 なまこ目地
軒先クラハ 蛇腹漆喰塗 軒先樋 銅板製 半丸 120/2φ 堅樋 75φ

・内部仕上

1階

床 板貼 幅広板松 240幅 厚み21

壁 貫板 小舞搔き 土壁塗り 中塗り押え仕上げ 一部縦板貼

天井 2階床板現わし化粧 厚み21

2階

床 板貼 幅広板松 240幅 厚み21

壁 貫板 小舞搔き 土壁塗り 中塗り押え仕上げ

天井 屋根化粧野地板現わし 小屋組現わし 中置き梁

・建物の特徴

- ・高台ではあるが、西面・北面に山を抱え、水捌けや湿気防止を考慮し思い切って高床にしてある。(地盤から約2.0m) 中倉は1.2階共木製の連続した押入が設置しており、書類関係の保管のほか、生活上大切な道具類の収納に使われていたようである。2階の床板が一部取り外せるようになって居り、大きな荷物は滑車等を利用して吊り上げ、階上に取込んでいたものと思われる。風の通りを考え複数の窓が配置されている。2階の荷重に十分耐えられるよう中柱が3本あり、梁材とともに安定した架構となっている。
- ・外観は豪商の家によくみられる本瓦葺・黒漆喰塗壁で特に四半貼の貼瓦となまこ目地仕上げの大蔵で、蓄財した富を感じさせかつデザイン性を高めている。

米蔵

・構造・規模

木造 2階建て 床面積 1階 68.8m² 2階 68.8m² 延床 137.6m² 約3.3間×6.4間
床の高さ 約1.5m 軒高 約5.5m 妻入り 片引漆喰塗戸 網戸付

・基礎

基壇 御影石加工積 小叩き仕上 高さ約1.5m 外階段 御影石6寸角 小叩き仕上

・外壁

黒漆喰塗 腰 貼瓦なまこ壁塗り菱貼 出隅貼瓦 なまこ壁 西面 焼き板貼
開口部 2階内開窓 平板面格子付き塗籠 瓦庇 目板付板瓦 玄関屋根本瓦葺

・屋根

日本瓦本葺 軒先巴瓦葺 勾配 5寸 クラ 千枚葺 派風漆喰塗 貼瓦 なまこ目地
軒先クラ 蛇腹漆喰塗 軒先樋 銅板製 半丸 120/2φ 竪樋 75φ

・内部仕上

1階

床 土間コン押え仕上げ 壁換気口

壁 貫板 小舞搔き 土壁塗り 黒漆喰塗り仕上げ 一部縦板貼

天井 2階床板現わし化粧 厚み21

2階

床 板貼 幅広板松240幅 厚み21

壁 貫板 小舞搔き 土壁塗り 中塗り押え仕上げ

天井 屋根化粧野地板現わし 小屋組現わし 中置き梁

・建物の特徴

- ・高台ではあるが、西面・北面に山を抱え、水捌けや湿気防止を考慮し思い切って高床にしてある。(地盤から約2.0m) 米倉は米の保管を主体に、山や田畑の管理上の大切な道具類の収納にも使われていたようである。2階の床板が一部取り外せるようになって居り、大きな荷物は滑車等を利用して吊り上げ、階上に取込んでいたものと思われる。風の通りを考え複数の窓が配置されている。2階の荷重に十分耐えられるよう中柱が2本あり、梁材とともに安定した架構となっている。
- ・外観は豪商の家によくみられる本瓦葺・黒漆喰塗壁で特に四半貼の貼瓦となまこ目地仕上げの大蔵で、蓄財した富を感じさせかつデザイン性を高めている。

・その他の特徴

全体敷地の中で建物の配置上、一般的には南東に玄関があり、北西に建物が伸びていき、北西の角に蔵を建てるような造りが、風水等では吉相といわれる。

当中山家住宅では、当時計画に当たって家相を重要視されたどうかは不明だが現実的には理にかなった形態をとっている。

南の大胆な敷地の高低差をまるで一国のお城のような大きな石積で処理し、北側には自然の要塞のような山を背景に広大な平地を確保し、豪邸を築いている。

今は現存しない北の附属屋群も昔の繁栄の面影を思わせる基礎の痕跡が見られる。

北側の山には多くの果実の実りの恩恵を授かり、秋は見事な錦に彩られたに違いないだろう。また中腹に向かって山道を登ればこの地の鎮魂と当家の安全を祈願するお社に出くわす。穏やかな日常が住人を包んでくれていたはず。

また南の高台の敷地からは当時は水島灘が見渡せ、さもや雄大な景色であったろう。

今は念願の大工業地帯が完成し、全国屈指の規模で繁栄を続けている。

各蔵の外観・内観写真を配置